

社会を明るくする運動

法務省が主唱する「社会を明るくする運動」。市では啓発事業の一環で、市内の小中高校生を対象に作文を募集しました。広報きくち9～11月号で各部門の最優秀作文を紹介します。

高校生の部最優秀作文

夢の土俵で挑む! 新たな2千年の里づくり

菊池農業高校1年 わた なべりゅうせい 渡辺琉聖さん



現在、日本で「農家」と呼ばれる人たちのほとんどは兼業農家であり、農業一本で生活が成り立つ専業農家は、ほんのひと握りしかありません。若者は農地を離れ、街へと出て行っただけもどって来ない。今にも消えそうな「農村の灯」を、いかに燃やし続けるか、それが、現代農業が直面している最大の課題です。「農家は3代続いたらましな方。4代目から後を続けるのはかなり厳しい」高齢者の方がほとんどになった私の地元でも、こんな言葉がよく聞かれます。「だったら自分が、5代目から後の歴史をつくる！」そう決心して、私は、ここ菊池農業高校へ進学しました。

わが家は、「米作り2千年の歴史」として日本遺産にも登録された菊池川流域の豊かな恵みのもとで、コメ・ムギを約10町、アスパラガスを6つの単棟ハウスで栽培する、専業農家です。父は若いうちから一家の大黒柱として家族を支え、今では地元のリーダーとして、多くの仲間と共に稲作の歴史をつないでいます。いきいきと仕事に取り組む父の姿は、いつしか私の目標となり、精米やコメ袋の運搬、苗箱の補充や水田の補植など、本格的な手伝いを始めた小学

校高学年のころには、「自分も父のように、ふるさとを支える存在になり！」という決意が、私の中ではつきりとしたものになっていました。

環境に配慮した減農薬栽培で避けて通れないのが、さまざまな生物からの被害です。そこでわが家では、害虫の動きが活発になる満月の前後に散布することで、少量の薬剤でも効き目が出るよう工夫したり、水位を調整することで、雑草や害虫だけを補食してくれるよう、ジャンボタニシの動きを制限するなど、昔からの知恵を活かした小さな積み重ねを大切にしています。

またこれからは、女性や外国人の方の存在が欠かせないものになると考えます。それぞれの仕事のペースや持ち味を生かす新しい働き方の仕組みづくりにについても、考えていく必要があると感じています。

そんな昔ながらの知恵と、多様性を大切にしたい農業を実現したい。私の夢実現のためのプラン、それは、豊作を願う相撲文化を活かした、「田舎の相撲部屋主催・農村満腹ツアー」です。

まず、空き家になってしまった古民家を改築し、そこに都会に住む子どもたちを招きます。米作り体験で

は、収穫した稲わらを活かして、参加者みんなで一から土俵づくりに取り組み、自分たちでつくった土俵で、互いを鍛え合います。相撲の稽古の後には、わが家の七城米と野菜で、お腹いっぱいちゃんこを食べてもらいます。全国の相撲部やプロの力士の方々にも出稽古に来てもらい、外国からのお客様にも、日本の伝統文化を体感してもらいたい。性別や出身地、立場を越えて、だれもが元気になる場所を地元菊池に創ること。それが私の夢です。

みんなで体を動かすことの楽しさ、農作物を余すところなく活かすことの大切さ、そして努力した後のとれたての美味しさをアピールし、「達成感や仲間との一体感は、何ものにもかえられない大きな価値がある」という農業の魅力を、広く発信していきたいと考えています。

豊かな菊池川がもたらす、米作りの里「次の」2千年の歴史をつなぐため、笑顔あふれる仲間が、いつもにぎやかに土俵の周りに集う、毎日が満員御礼の夢の舞台を、ふるさと七城町につくりたい。その、はじめの一歩を踏み出すため、これからも頑張ります。

※作文は一部抜粋